

劉備玄德

その1、桃園の誓い

桃園の誓い（とうえんのちかい）は、桃園結義（とうえんけつぎ）とも称され、『三国志演義』や『通俗三国志』ならびに吉川英治の三国志の序盤に登場する劉備・関羽・張飛の3人が、宴会にて義兄弟（長兄・劉備、次兄・関羽、弟・張飛）となる誓いを結び、生死を共にする宣言を行ったという逸話のことである。

これは正史の『三国志』にない逸話であって創作上の話であるとされており、劉備が二人に兄弟のような恩愛をかけ、関羽・張飛は常に劉備の左右に侍して護り、蜀漢建国に際して大いに功績があった、という史実に基づいて作られた逸話である。

吉川英治は、その序文で

『 三国志には詩がある。（中略）三国志から詩を除いてしまったら、世界的といわれる大構想の価値もよほど無味乾燥なものとなろう。故に、三国志は、強いて簡略にしたり抄訳したものでは、大事な詩味も逸してしまうし、もっと重要な人の胸底を搏つものを失くしてしまう惧れがある。で私は簡訳や抄略を敢てせずに、（中略）主要人物などには、自分の解釈や創意をも加えて書いた。』・・・と記しており、原作や訳書にこだわらずに、吉川英治流の味付けで日本人向けに物語を描くことを宣言している。

『三国志演義』冒頭の劉備・関羽・張飛三人による桃園の誓いも、原作ではあっさりと三人が意気投合してすぐさま義兄弟となるのに対し、張飛との運命的な出会い、黄巾族にさらわれた美女芙蓉との恋心、張飛や関羽と劉備の母との出会いなど、大胆な改編を行って三兄弟の人物描写を読者に強烈に印象づけている。実際に三人が義兄弟の盟を結ぶのは、それらの話が終わってからである。冒頭の三兄弟に関しては完全に吉川独自の物語となっている。

三人が義兄弟の盟を結んでから、いよいよ旗揚げをして、義勇兵として黄巾族討伐に向かう。

その1、桃園の誓い：<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/touennoti.pdf>

その2、劉備玄德、平原県（山東省・平原）の令となる

劉恢（りゅうかい）は、歴史上、劉邦の第5子のほか何人かいるようであるが、吉川英治の三国志では、代州の富豪として登場する。芙蓉姫と親戚関係にあり、張飛とも面識がある設定となっている・・・まったくの架空の人物である。

「はじめに」でも述べたが、吉川は「序」で三国志には詩がある。（中略）三国志から詩を除いてしまったら、世界的といわれる大構想の価値もよほど無味乾燥なものとなろう。故に、三国志は、強いて簡略にしたり抄訳したものでは、大事な詩味も逸してしまうし、もっと重要な人の胸底を搏つものを失くしてしまう惧れがある。で私は簡訳や抄略を敢てせずに、（中略）主要人物などには、自分の解釈や創意をも加えて書いたと記しており、原作や訳書にこだわらずに、吉川英治流の味付けで日本人向けに物語を描くことを宣言している。そして、「その2」においてもまったくの架空の人物・芙蓉姫が「その1」に引き続いて登場している。

劉恢と芙蓉姫とは親戚関係にあり、劉備らが劉恢の屋敷に匿われた時、芙蓉姫も劉恢の屋敷に身を寄せており、二人は逢瀬を楽しむこととなる。この場面はまったく吉川英治流の味付けで、吉川英治の三国志を潤いのある物語にしている。

劉恢は、浪人を愛し、常に多くの食客を養う悠々自適の風流人である。そのような劉恢は、劉備が出世の糸口をつかむ大恩人として描かれている。つまり、劉備は、親友・劉虞（りゅうぐ）を紹介し、その人のお陰で劉備が出世の糸口をつかむのである。劉虞はちょうど、中央の命令で、漁陽に起った乱賊を誅伐にゆく出陣の折であったから、大いによるこんで、劉備らを自分の軍隊に編入して、戦場へつれて行った。劉備らは大いに戦功をあげ、劉備はその功績により、平原県（山東省・平原）の令になるのである。劉虞は劉備の大功を上表して、かつて安喜県で督郵を鞭打った罪が赦されるように取り計らった。

三国時代、中国全土には10数箇所の州があった。その下に郡があり、その郡の下に県があった。そして、「県令」という行政官が置かれていた。県知事みたいなものである。その部下に県尉がいる。

劉備は、かつて安喜県の県尉になったことがあるが、劉虞（りゅうぐ）のお陰で平原県（山東省・平原）の「県令」になるのである。平原県は地味豊饒で錢糧の蓄えも官倉に満ちており、大いに武を練り兵を講じ、駿馬に燕麦を飼って、時節の到来を待つのである。

その頃、朝廷は大いにみだれ、再び大きな戦争が始まる予感があったのである。吉川英治の三国志はその朝廷のみだれを次のように書いている。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/tyouteinomi.pdf>

また、そのような朝廷のみだれの中、何進が死んで、次の権力者・董卓の登場となる。ウィキペディアでは次のように説明している。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/kasin.pdf>

次の「その3」では、いよいよ董卓と反董卓軍との激しい戦いとなる。劉備にしてみれば、いよいよ時節の到来である。その前夜がこの「その2、劉備玄德、平原県（山東省・平原）の令となる」なのである。

その2、劉備玄德、平原県（山東省・平原）の令となる: <http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/heigennorei.pdf>

その3、劉備玄德、平原の相となる

董卓は、辺境の将軍の1人にすぎなかったが、軍事力を背景に次第に頭角を現すようになった。霊帝死後の政治的混乱に乗じて政治の実権を握り、少帝弁（霊帝の崩御に伴い、何太后とその兄である何進により擁立された。）を廃して献帝（後漢最後の皇帝）を擁立し、一時は宮廷で権勢をほしいままにした。

献帝（けんてい）は、後漢の最後の皇帝。諱は協。霊帝（劉宏）の次子で、少帝弁（劉弁）の異母弟。生母の王栄は豊満な女性、聡明で算数が得意である。霊帝の寵愛を受けて、劉協を産むと、何皇后の嫉妬を受けて毒殺されたという。母を失った劉協は、霊帝の生母の董太后が住む宮殿で養育されたため、董侯と呼ばれた。

中平5年（189年）4月、霊帝が崩御すると劉弁が即位し、劉協は渤海王に封じられた。

同年秋7月、陳留王に移封される。当時、朝廷では外戚であった何進の派閥と十常侍ら宦官の勢力が対立していたが、8月に何進が嘉徳殿の前で十常侍に暗殺されると、袁紹らが挙兵して押し寄せ、混乱に陥った。数日で宦官勢力は敗れた。しかし、その際に陳留王は少帝とともに張讓・段珪によって、雒陽（洛陽）から連れ去られた。変を知り軍を率いて上洛してきた董卓は宦官勢力を一掃、少帝と陳留王は董卓に保護され都に戻る事が出来た。その後、朝廷の実権は、董卓によって握られた。

董卓は曹操を仲間に引き入れようとするが、董卓の暴虐ぶりを見た曹操は妻子も連れずに洛陽から脱出し、故郷に逃げ帰った。

董卓暗殺を謀り賞金首となった曹操は中牟県で兵士に捕らえられてしまう。しかし、曹操の志を知った役所の役人陳宮は曹操を英雄と崇め、曹操に付き従い脱走する。逃避行中、曹操の内に秘めた恐ろしさにより、陳宮から見捨てられるものの、故郷に戻った曹操は全国に檄文を送り、袁紹を盟主とする董卓討伐軍を編成し、董卓軍と対決することとなった。

しかし、董卓軍には華雄という猛将がいた。董卓討伐軍の数々の武将が討たれる中、討伐軍に参加していた劉備の部下関羽が名乗りを挙げ、見事華雄を討ち取る。勝利に乗じて攻め込む討伐軍に、今度は呂布が立ちはだかる。これを、劉備、関羽、張飛の3人で退け、虎牢関まで攻め込んだ。

討伐軍の曹操と袁紹は董卓軍の壊滅をさせるため、王允に密書を送り、朝廷内外から董卓軍の挟み撃ちを謀る。その動きが董卓のしるところとなり、王允は取り調べられるが、黄巾の乱の折、王允の養女となった美しい娘・貂蟬の気転により、窮地を脱する。

討伐軍と朝廷内からの反乱を恐れた董卓は、都を洛陽から長安に遷都することを強引に決定する。何進と十常侍が共に滅び、董卓が朝廷の実権を握ると、橋瑁は三公の公文書を偽造し、董卓に対する挙兵を呼びかける檄文を作った（『後漢書』）。小説『三国志演義』では、檄文を作ったのは橋瑁ではなく曹操ということにされている。

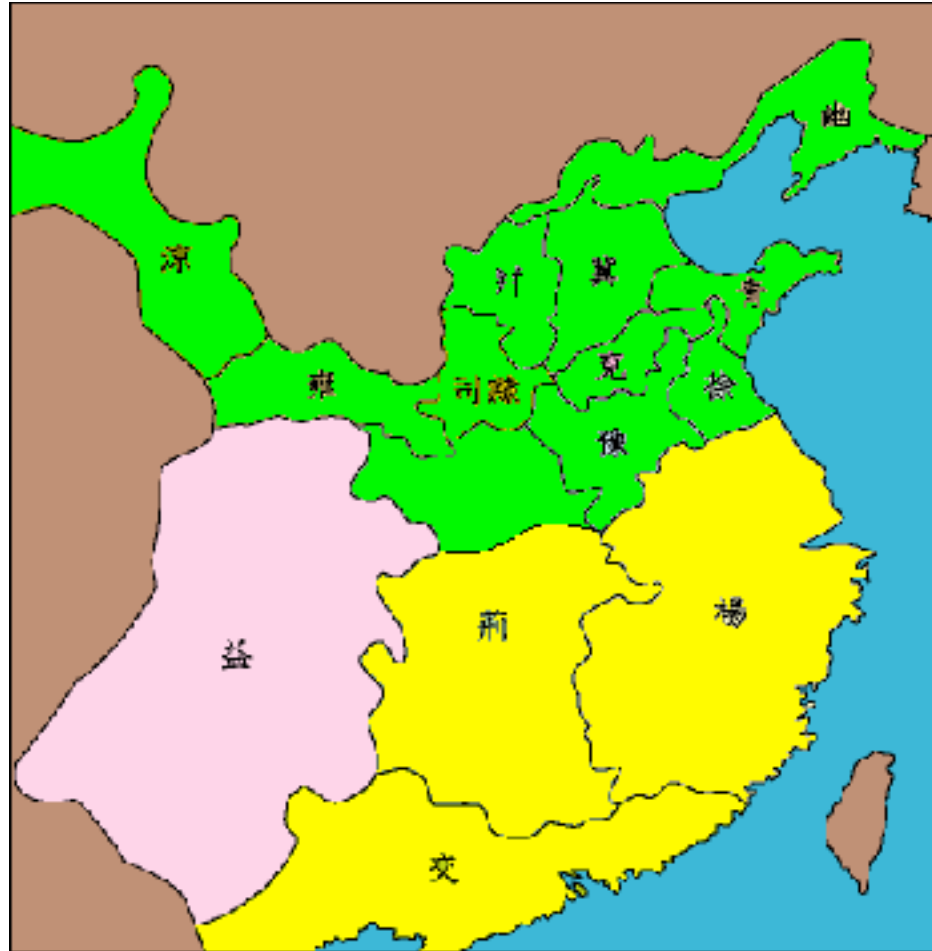
かくして、董卓と反董卓軍との激しい戦いが始まり、劉備らは大いに戦功をあげ、その功績によって平原郡の相となるのである。

三国時代、中国全土には10数箇所の州があった。その下に郡があり、その郡の下に県があった。劉備は、県の令から郡の相に昇進する。何人かの県令を束ねる立場である。平原郡は、現在の山東省あたりの地域で、当時は青州といった。いずれこの地域は曹操の支配する地域となる。

曹操は豫州の沛国譙県（現在の安徽省亳州市。徐州の西隣り。）生まれであり、その生誕地・沛国には沛国曹氏・沛国夏侯氏と優秀な親族が揃っており、この地方は曹操一族の勢力下にあった。安徽省亳州市は、劉備が相を務めた平原郡に近い。

劉備は自ずと曹操一族ならびに曹操の勢力を意識せざるを得なく、曹操とは争いたくなかったに違いないが、平原相の時代に争っている。そのことについては、「その4」で詳しく説明するが、曹操は殺された亡父の仇討ちとして、徐州の陶謙を攻める。徐州の陶謙は正義の人であり、曹操の父を殺す気など全くなかったのだが、よからぬ部下が曹操の父を殺害する。もちろん部下の仕業とはいえ、その責任は主人にあるので、曹操は陶謙を仇とするのである。曹操は、10余城を陥落させるも、陶謙は籠城して出てこなかったため、翌年の春には兗州へと帰還。青州平原から陶謙の救援のためにやってきた劉備は、勢い、曹操と戦うことになるのである。

この当時、劉備の拠点清州であり、曹操の拠点は豫州であった。そして、陶謙の拠点は徐州であった。劉備は陶謙の拠点城に居続けて、曹操と争うのである。



(<http://bantiki.fc2web.com/syuu/syuu.html> による)

その3、劉備玄德、平原の相となる：<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/heigennosyou.pdf>

その4、劉備玄德、徐州の太守となる

董卓殺害後、王允と呂布は共に朝政を掌握し、呂布は奮武將軍に任じられ、温侯・儀同三司となり、仮節を与えられた。しかしその後呂布が涼州軍を憎んだ為に董卓の軍事力の基礎であった郭汜・李傕ら涼州の軍勢が長安を襲撃してくると、呂布は郭汜を一騎討ちで破るも防ぎきれず、李傕らに長安を奪われた。呂布と王允の統治はそれなりに良かったようである。

呂布は王允を助けようとしたが叶わず、董卓の首を馬の鞍にぶら下げ、数百騎を率いて武関から逃亡した。董卓の死から60日後のことであったという。

呂布はまず荊州に赴き、袁術に手厚くもてなされたが受け入れられず、次に袁紹を頼った。袁紹は黒山賊の張燕と戦っているときであったので、呂布を迎え入れ、共に常山の張燕を攻撃した。張燕は精兵1万と騎馬数千匹を率いて勢威を振るっていたが、赤兎馬に乗った呂布と、呂布配下の勇将・成廉、魏越率いる数十騎が1日に3,4度も突撃して次々に張燕軍を討ち取ったため、数十日後に遂に敗れ、以後黒山賊は離散した。この戦いの後愛馬である赤兎とともに「人中に呂布あり、馬中に赤兎あり」と賞されたという。

『後漢書』呂布伝では『三国志』と異なり、袁術、張楊、袁紹、張邈、張楊の順に身を寄せたという。その後、徐州の太守・劉備玄德を頼る。吉川三国志を私なりに紹介する「その3」は、劉備が平原県の令を経て平原郡の相となる話であった。董卓と反董卓軍との激烈な戦いが始まり、劉備らは大いに戦功をあげ、その功績によって平原郡の相となるのである。今回の「その4」は、何か戦功をあげるというのではなく、彼の人徳により徐州の太守となる話である。正義の人、劉備。彼の面目躍如たる物語、それがこの「その4」である。

曹操は次第に力をつけ、兗州を支配するようになっていた。人材を集め、兗州が彼の本拠地となっていたのである。その頃、すでに述べたように、曹操の父が殺される。父の住んでいたところは、兗州に近く、大いに親孝行をしようと父を兗州に呼び寄せる、その途中で父が殺されるのである。曹操は殺された亡父の仇討ちとして、徐州の陶謙を攻める。徐州の陶謙は正義の人であり、曹操の父を殺す気など全くなかったのだが、よからぬ部下が曹操の父を殺害する。もちろん部下の仕業とはいえ、その責任は主人にあるので、曹操は

陶謙を仇とするのである。曹操は、10余城を陥落させるも、陶謙は籠城して出てこなかったため、翌年の春には兗州へと帰還。青州平原から陶謙の救援のためにやってきた劉備は、勢い、曹操と戦うことになる。陶謙の評価はいろいろあるようであるが、吉川三国志では陶謙は正義の人として描かれている。陶謙は病で重篤に陥り、子の陶商・陶応が揃って不出来であるという理由から、[糜竺](#)に徐州を劉備に譲るよう遺言を託し、間もなく死去した。劉備はその申し出を断り続けるのであるが、住民からも領主になってもらいたいとの声が巻き起こり、遂に、劉備は徐州の太守になることを引き受ける。

三国時代、中国全土には10数箇所の州があった。その下に郡があり、その郡の下に県があった。州は一つの国であり、太守というのはその領土を支配するいわば領主のことである。劉備は遂に徐州という国の領主に上り詰めるのである。徐州は、本来、曹操の勢力範囲であり、いずれ劉備は徐州を離れることになるが、それは後ほどのことである。

今回の「その4」では、流浪の人・呂布は流浪の拳句、劉備を頼って身を寄せる。劉備は呂布を手厚く処遇するのである。

その4、劉備玄德、徐州の太守となる：<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/jyosyuuno.pdf>

その5、呂布が殺害される

董卓殺害後、王允と呂布は共に朝政を一時掌握したが、董卓の軍事力の基礎であった郭汜・李傕らにはぶれ、数百騎を率いて武関から逃亡した。董卓の死から60日後のことであったという。『後漢書』呂布伝では袁術、張楊、袁紹、張邈、張楊の順に身を寄せたという。前回の「その4」では、流浪の人・呂布は流浪の拳句、劉備を頼って身を寄せ、劉備は呂布を手厚く処遇した。

その後の話が今回の「その5、呂布が殺害される」である。呂布が劉備のところに身を寄せまもなく、徐州を巡って劉備が袁術と戦うようになると、その隙を突いて呂布は劉備の本拠[下邳](#)を奪い取った。行き場を無くした劉備が呂布に降伏すると、呂布は劉備を豫州刺史にし自らは徐州刺史を名乗った。

ところで、下邳は徐州にあり徐州には劉邦の故郷、小沛があるが、徐州は中国史を語る上で欠かせないところで、[徐州](#)は項羽の本拠地でもあるし、小沛は劉邦の故郷であり下邳は劉邦の軍師忠良の隠れ住んだ所でもある。

その後、袁術が[紀靈](#)らに歩・騎兵あわせて3万を率いさせ、再び劉備を攻撃しようとしたため、劉備は呂布に救援を求めた。呂布は袁術と泰山諸將([臧霸](#)ら)による包囲を警戒し、呂布軍の諸將の諫めを遮って歩・騎兵1千人余りで劉備・袁術を調停。陣中で戟を射て両軍を撤退させた。その後、呂布は1万の兵を集めた劉備を攻め、小沛を陥落させた。劉備は逃走し、曹操を頼った。

建安3年(198年)呂布はまた袁術と同じ、部下の高順を派遣して小沛の劉備を陥落させ、臧覇等が呂布に従った。そこで曹操は自ら大軍を率いて徐州に攻め込んだ。10月曹操軍が彭城を落とすと陳宮は献策したが呂布は聞かず、しばしば下邳に到着した曹操と戦うも皆大敗し、下邳に籠城した。包囲して後、下邳を攻め落とせず疲弊した軍を憂え撤退を計る曹操に対し、曹操軍の[荀攸](#)・[郭嘉](#)は水計を考案し実行に移されると、[侯成](#)等は陳宮達を捕えて呂布を裏切り、呂布は後に部下と投降。この時呂布は部下に自分を売って曹操に降るよう命じたが、部下達は遂行出来なかったとも言う。

呂布が「(曹操)殿が悩みとしていたのは私一人でしょう。それが降伏したなら天下に心配事はもう有りますまい。殿が歩兵を率い、私が騎兵を率いれば、天下の平定は容易なことです」と語ると、曹操は顔に疑惑の色を浮かべた。劉備が進み出て呂布が過去に丁原・董卓を裏切った例を挙げて曹操を諫めると、曹操もそれに頷いた。呂布は「こいつ(劉備)こそが一番信用できない者だ」と主張したが、縛り首にされ、重臣の陳宮・高順らも斬首された。呂布・陳宮・高順らの首は[許](#)に送られ、後に埋葬されたという。

呂布が殺害されるに至るその陰には、[陳大夫陳登父子の謀み事](#)がある。陳大夫父子は、呂布にとっては裏切り者であるが、劉備や曹操にとっては大の功労者である。

その5、呂布が殺害される：<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/ryohusatu.pdf>

その6、左將軍宜城亭侯・劉備玄德

三国時代、中国全土には10数箇所の州があった。その下に郡があり、その郡の下に県があった。州は一つの国であり、太守というのはその領土を支配するいわば領主のことである。劉備は遂に徐州という国の領主に上り詰めるのである。徐州は、本来、曹操の勢力範囲であり、曹操と良好な関係にないとやっていけない。この頃は劉備は曹操の覚えもよく良好な関係にあった。そのことは「その4」で述べた。そしてまた「その5」では、曹操の密書により、共に兵を挙げ、遂に呂布が殺される、それまでの経緯を述べた。

「その6」は、曹操と劉備は呂布を討伐して、許都に凱旋するところから始まる。曹操は、例によって、功ある武士に恩賞をわかち、都民には三日の祝祭を行わせた。朝門街角ともその数日は、挙げてよろこびの声に賑わった。玄徳の旅舎は丞相府のひだりに定められた。特に一館を彼のために与えて、曹操は礼遇の意を示した。のみならず、翌日、朝服に改めて参内するにも、玄徳を誘って、ひとつ車に乗って出かけた。市民は軒ごとに、香を焚いて道を浄め、ふたりの車を拝跪した。そして、ひそかに、「これはまた、異例なことだ」と、眼をみはった。

劉備は曹操に連れられて曹操の根拠地で献帝のいる許昌へ入り、左將軍に任命された。ここでの劉備に対する曹操の歓待振りは、車を出す時には常に同じ車を使い、席に座る時には席を同格にすると言う異例のものであった。曹操と歓談していた時に曹操から「今、この天下に英雄と申せる者は、おぬしとこのわしのみだ」と評されている。

そのあと徐州に帰った玄徳はまず、老母の室へ行って、老母の膝下にひざまずき、「母上、あなたの息子は、今帰って来ました。こんど都に上って、天子に謁し、その折、ご下問によって、初めて、わが家の家系をお耳に達しましたところ、天子には直ちに、朝廷の系譜をお調べになり、まぎれもなく、劉玄徳が祖先は、わが漢室の支れた者の裔である――玄徳は朕が外叔にあたるものぞと、勿体ない仰せをこうむりました。」と報告した。

かくして劉備玄德は、献帝の劉皇叔と呼ばれるようになったのである。

この頃、宮中では献帝よりの密詔を受けた董承による曹操討伐計画が練られており、劉備はその同志に引き込まれた。その後、討伐計画が実行に移される前に朱靈・路招らと共に袁術討伐に赴き、都から徐州に逃げ出す名分を得たという。

その6、左將軍宜城亭侯・劉備玄德：<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/ryuukousyuku.pdf>

その7、社稷の臣

「社稷」がいわば農業神の祭祀と考えたと、古代においては事実上天下国家であるとか民の生活であるとかに当たるのではないかと思う。つまり「社稷の臣」とは、「天下の民を優先して考える臣」であり、それはそもそもの由来からして「君主よりも天下万民を優先する臣」という意味合いを含んでいる。前漢文帝の時、呂後の一族を排除する上で重要な働きをした周勃は文帝からも極めて鄭重な扱いを受けていたが、袁盎なる人物はそれに対してこう進言した。「丞相周勃は「功臣」ではあっても「社稷の臣」ではございません。

「社稷の臣」というのは主君と共にあり、主君が滅べば共に滅びるような存在です。呂後の時代、劉氏の天下が危うくなりながらもそれを正すことが出来なっていた周勃は「社稷の臣」ではないのです。そんな者に対して謙讓するというのはよろしくありません」袁盎によれば「社稷の臣」とは、天下万民の為、主君と共に生き主君と共に死するような者であるらしい。

劉備玄德はまさに社稷の民である。それに反し曹操はいずれ主君を倒し天下を取ろうという野心を持っていた。そういう曹操は、許昌に献帝を迎え、献帝に忠節を尽くしているように見せかけていても、その傲慢さは献帝のみならず献帝の見じかに支える忠臣にもなんとなくわかるものである。献帝の見じかに支える忠臣董承という人物がいる。董承は、献帝の義理の叔父で、演義では娘が献帝の妃で、

国舅(こくきゅう)と呼ばれている。皇帝の外威である董承は、次第に権力を強大化させる曹操を恐れ、同志を集めてクーデターを起こそうとする。董承は、献帝から曹操打倒の密勅が仕込まれた玉帯を受け、同士と計画を練る。

董承は、ある日、劉備に密詔を示した。燈火をきって、それへ眸をじっと落していた玄徳は、やがてとめどもなくながれる涙を両手でおおってしまった。悲憤のあまの鬢髪はそそけ立って燈影におののき慄えていた。「おしまい下さい」涙をふき、密詔を拝して、玄徳はそれを、董承の手へ返した。「国舅のご胸中、およそわかりました」「ご辺も、この密詔を拝して、世のために涙をふるって下さるか」「もとよりです」「かたじけない」と、董承は、狂喜して、幾たびか彼のすがたを拝した後、「では、さらにもう一通、これをごらん願いたい」と、巻をひらいた。同志の名と血判をつらねた義状である。

本頭に、車騎將軍董承。第二筆に、長水校尉輯。第三には、昭信將軍吳子蘭。第四、工部郎中王子服。第五、議郎吳碩などとあつて、その第六人目には、西涼之太守、馬騰。と、ひときわ筆太に署名されてある。硯を持って、玄徳は、義状の第七筆に、左將軍劉備と謹嚴に書いた。

その7、社稷の臣：<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/syasyokuno.pdf>

その8、玄徳冀州へ奔(はし)る

淮南の袁術は、自己の僭称せる皇帝の名と共に、持つところの伝国の玉璽をも、兄袁紹へ譲与するために、淮南から袁紹にいる河北に向かおうとしていること、そして、その袁術をやっつけるという名目で劉備は徐州に戻ったことは、「その6」において述べた。

袁術は、賢帝がまだ健在であるにも関わらず後漢の時代は終わったとの見通しを持っており、古くからの名門貴族なるがゆえに皇帝を名乗った人物である。

「その8」では、まず袁術の惨めな最期が描かれる。淮南の袁術は、みずから皇帝と称して、居殿後宮も、すべて帝王の府に擬し、莫大な費えをそれにかけてので、いきおい民に重税を課し、暴政のうえにまた暴政を布くという無理をとらなければ、その維持もできない状態になってしまった。当然――、民心はそむく、内部はもめる。雷薄、陳闌などという大将も、これでは行く末が思いやられると、嵩山へ身をかくしてしまうし、加うるに、近年の水害で、国政はまったく行き詰まってしまった。そこで、袁術が、起死回生の一策として、思いついたのが、河北の兄袁紹へ、持て余した帝号と、伝国の玉璽を押しつけて、いよいよ身を守ることだった。

徐州の近くである。玄德の軍は待ちうけていた。総勢五万、朱霊、露昭を左右にそなえ、玄德をまん中に、鶴翼を作って包囲した。次々と、袁術の麾下は、討ち滅らされていった。そのうえ、乱れ立ったうしろから、一彪の軍馬が、袁術の中軍を猛襲し、兵糧財宝、婦女子など、車ぐるみ奪掠していった。白昼の公盗は、まだ戦っているうちに、行われたのである。しかもその盗賊軍は、さきに袁術を見限って嵩山へかくれた旧臣の陳闌、雷薄などの輩だった。そして遂に袁術は誠に惨めな死に方をするのである。

玄德は所期の目的を果たしたので、朱霊、露昭の二大将を都へ返し、曹操から借りてきた五万の兵は、「境を守るために」と称して、そのまま徐州にとどめおいた。朱霊、露昭の二将は都へ帰って、その由を曹操に告げると、曹操は、烈火のごとく怒って、いよいよ劉備討伐の決意を固める。

曹操軍・二十万の大軍は、まもなく近々と小沛の県界まで押してきた。東のほうからは張遼の一陣、西のほうからは許、南からは于禁、北からは李典。また東南よりは徐晃の騎馬隊、西南よりは楽進の弩弓隊、東北よりは夏侯惇の舞刀隊、西北よりは夏侯淵の飛槍隊など、八面鉄桶の象をなしてその勢無慮十数万――その何十分の一にも足りない張飛、玄德の小勢をまったく包囲して、「一匹も余すな」と、ばかり押しつめてきた。下邳の関羽はなんとか持ちこたえていたが、小沛の張飛と劉備は、それぞれ別の道へと落ち延びていくのである。劉備は止むを得ず袁紹を頼って冀州へ奔(は)しる。「かねての約束、たごうべからず――」と袁紹はただちに一軍を迎えに差向けて、玄德の身を引取る。しかも、冀州城外三十里の地――平原というところまで、袁紹自身、車馬をつらねて出迎えにでていた。よほどの優遇である。そこまでが「その8」である。

その8、玄德冀州へ奔(はし)る：<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/yokusyuuhe.pdf>

その9、関羽千里行

「その8」では、いよいよ劉備討伐の決意を固め、曹操軍・二十万の大軍が劉備討伐に向かった。下邳の関羽はなんとか持ちこたえていたが、小沛の張飛と劉備は、それぞれ別の道へと落ち延びていくのである。劉備は止むを得ず袁紹を頼って冀州へ奔(はし)る。「かねての約束、たごうべからず——」と袁紹はただちに一軍を迎えに差向けて、玄徳の身を引取る。「その8」はそういう話である。

「その9」は、日頃関羽の武勇と人柄に惚れ込んでいた曹操は、なんとか関羽を自分の居城のある許都に迎え入れようとする。関羽は、「劉皇叔の二夫人、御嫡子、そのほか奴婢どもにいたるまで、かならずその生命と生活の安全を確約していただきたい。」という条件を出し、「いまは劉皇叔の消息も知れぬが、一朝お行方の知れた時は、関羽は一日とて、曹操のもとに晏如と留まっておるものではござらん。千里万里もおろか、お暇も告げず、直ちに、故主のもとへ立ち帰り申すであろう。」という本音を申し述べる。曹操はその条件を飲み、関羽を賓客として都・許都に迎え入れる。数年が経ち、劉備が生きているという噂が伝わってき、さらに劉備の手紙が届けられる。そして関羽の千里行が始まるのである。「その9」はかの有名な関羽千里行の話である。

曹操は関羽を厚遇し、関羽はそれに恩を感じ、官渡の戦いにおいては敵将の顔良(がんにょう)を斬って捨てるなどの功績を挙げ、曹操のために働いていたが、劉備の消息がはっきりすると、関羽は感謝の手紙を残して曹操のもとを去る。追っ手を差し向けようとする部下を、曹操は止め、彼は、関羽を追い別れを告げる。曹操は関羽が劉備のもとへ戻っていくことを理解していたのだった。

関羽は次々と関所を突破し、そこを守る将を斬り捨てていく。これが関羽の五関突破である。東嶺関(とうれいかん)の孔秀(こうしゅう)、洛陽の韓福(かんふく)、沂水関(きすいかん)の卞喜(べんき)、滎陽(けいよう)の王植(おうしょく)、黄河の秦琪(しんき)と、5人の将を次々と打ち破っていく。最後には魏の猛将：夏侯惇(かこうとん)が待ち受けており、刃を交えますが、そこに張遼(ちょうりょう)が曹操の言葉を携えて駆け付け、戦いは中止となり、関羽は再び劉備のもとへ向かうこととなります。

しかしそこで、汝南(じょなん)の古城に立てこもるで張飛の消息が判明し、関羽はそちらへ向かい、張飛と再会する。小沛で曹操に敗れ、劉備・関羽らとはぐれてしまった張飛だが劉備の消息を求めているうちに古城にたどりつくのである。張飛は力づくで県令を追い出し、その地域を治めるようになっていたのである。その噂を聞きつけて、劉備の部下が集まるようになり、遂に、その古城で劉備三兄弟が再会を果たすのである。

その9、関羽千里行：<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/kansenri.pdf>

その10、軍師徐庶

関羽の武勇のみならず人格にも惚れ込んだ曹操が関羽を客将として優遇する物語、そして劉備の生存を知った関羽が曹操の元を離れ、苦難の千里行をするのが「その9」であった。その最後の場面であるが、汝南の劉辟もやがて馳けつけ、賀をのべいった。「この狭隘な地では、守るによくとも、大志は展べられません。かねてのお約束、汝南を献じます。汝南を基地として、次の大策におかかりください」・・・と。かくして玄德は、古城に一手の勢をのこして、即日、汝南へ移ったのであった。その後の話が「その10」である。

袁紹と雌雄を決する戦い（[官渡の戦い](#)）をくり広げていた曹操は、背後の敵・汝南の劉備が気になって仕方がなかった。そこで再び劉備討伐に向かう。激戦の結果、劉備軍は敗れ、劉備は同じく漢室の子孫である[劉表](#)を頼る。玄德が、その一族と共に、劉表を頼って、

荊州へ赴いたのは、建安六年の秋九月であった。劉表は郭外三十里まで出迎え、互いに疎遠の情をのべてから、「この後は、長く唇齒の好誼をふかめ、**共々、漢室の宗親たる範を天下に垂れん**」と、城中へ迎えて、好遇すこぶる鄭重であった。

劉表は酒宴の席で、彼は玄徳に杯を与えながらいった。「――一時にご辺も、館にいては市街に住み、出ては城中の宴に列し、こう無事退屈の中におられては、自然、武芸の志も薄らごう。わが河南の襄陽のそばに新野（河南省・新野）という所がある。ここには武具兵糧も籠めてあるから、ひとつ一族部下をつれて、新野城に行ってはどうか。あの地方をひとつ守ってくれんか」もちろん否やはない。玄徳は即座に命を拝して、数日の後、新野へ旅立った。劉表は城外まで見送った。

劉表には二子があった。劉は、前の妻陳夫人の腹であり、次男劉は、蔡夫人の産なした子である。長男の劉は、賢才の質だが柔弱だった。そこで次男のを立てようとした。その際邪魔なのが劉表の客将・劉備である。蔡夫人は兄の蔡瑁を呼んで、「どうしたものであろう」と、はかった。蔡瑁は自分の胸を叩いて、「此方にお任せ下さい」と、あわてて退がった。夕方までに、彼は極秘裡に一団の兵をととのえ、夜の更けるのを待っていた。翌日となれば、玄徳は新野へ帰る予定である。大事の決行は急を要したが、その客舎を襲撃するには、宵ではまずい。夜半か、夜明けか、寝込みを襲うが万全と考えていたのである。玄徳は、蔡瑁の計略を見破りそのまま南（湖北省・南）のほうをさして逃げ落ちて行った。その途中、劉備は得難き人物・徐庶に出会い、彼を軍師とするのである。軍師・徐庶のおかげで劉備軍は見違えるようになり、さまざまな戦いに勝つ。しかし、徐庶をなんとか劉備から引き話そうと、曹操の本拠地・許都に住んでいた母親を説得して徐庶を許都に呼び寄せようとするが、母親は、劉皇叔（劉備）こそ天下を治めるべき人物だと考えており、頑として曹操の説得の応じない。そこで曹操の部下・程（ていいく）は母親からというニセ手紙を書き、徐庶を許都に呼び寄せる。劉備徐庶共に別れを惜しみ、やむなく徐庶は、許都に旅立つ。しばらくたって、徐庶は取って返し、玄徳の鞍わきへ寄って、早口にこう告げた。「夜来、心みだれて麻のごとく、つい、大事な一言をお告げしておくことを忘れました。――彼方、襄陽の街を西へへだつこと二十里、隆中という一村落があります。そこに一人の大賢人がいます。――君よ。いたずらなお嘆きをやめて、ぜひぜひこの人をお訪ねなさい。これこそ、徐庶がお別れの置き土産です」云い終ると、徐庶はふたたび元の道へ、駒を急がせた。この大賢人こそ諸葛孔明である。徐庶から教えられ、諸葛孔明の存在を知るまでの話がこの「その10」である。なお、この「その10」では、袁紹と雌雄を決する戦い（[官渡の戦い](#)）をくり広げていた曹操は、遂に大勝利を収め、袁紹は亡くなる。いよいよ曹操の勢力は盤石のものになったようだ。

その10、軍師徐庶：<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/jyosyo.pdf>

その11、軍師諸葛孔明

この頃華北では、建安5年（200年）に曹操が袁紹を打ち破って覇権を手中にし、南進の機会を窺っていた。劉備は袁紹の陣営を離れて劉表を頼り、荊州北部・新野（河南省南陽市新野県）に居城を貰っていた。しかし、劉表の後妻・蔡夫人は兄の蔡瑁と相談をして、劉備を取り除こうとする。劉備は、蔡瑁の計略を見破りそのまま南（湖北省・南）のほうをさして逃げ落ちて行くその途中、劉備は得難き人物・徐庶に出会い、彼を軍師とする。人物鑑定家として有名な司馬徽も「時勢を識るは俊傑にあり」として諸葛亮を師とするよう薦めるが、さらに、徐庶は諸葛亮が自分よりはるかに勝る人物であることを劉備に詳しく話をする。ここまでが「その10」であったが、この「その11」は、劉備が、「三顧の礼」を尽くし、諸葛亮を軍師として迎える話である。

十年語り合っても理解し得ない人と人もあるし、一夕の間に百年の知己となる人と人もある。玄德と孔明とは、お互いに、一見旧知のごとき情を抱いた。いわゆる意気相許したというものであろう。

孔明は、細論して余すところなかった。かくその抱負を人に語ったのは、おそらく今日が初めてであろう。孔明の力説するところは、平常の彼の持論たる＝支那三分の計＝であった。

一体、わが大陸は広すぎる。故に、常にどこかで騒乱があり、一波万波をよび、全土の禍いとなる。これを統一するは容易でない。いわんや、今日においてはである。いま、北に曹操があり、南に孫権ありとするも、荊州、益州の西蜀五十四州は、まだ定まっていないちと、遅まきながら、起つならば、この地方しかない。北に拠った曹操は、すなわち天の時を得たものであり、南の孫権は、地の利を占めているといえよう。將軍はよろしく人の和をもって、それに鼎足の象をとり、もって、天下三分の大気運を興すべきである——と、孔明は説くのであった。

劉備は言う。「ねがわくは、どうか、朝夕帷幕にあつて、遠慮なく、この愚夫をお教え下さい」。

それに対して「いや」と、孔明は、急にことばをかえて云った。「今日、いささか所信を述べたのは、先頃からの失礼を詫びる寸志のみです。――朝夕お側にいるわけにはゆきません。自分はやはり分を守って、ここに晴耕雨読していたい」「先生が起たれなければ、ついに漢の天下は絶え果てましょう。ぜひなきこと哉」と、玄德は落涙した。玄德は天下の為に泣くのであった。その涙は一箇のためや、小さい私情に流したものではない。

至誠は人をうごかさずにおかない。

「……………」孔明は、沈思しているふうだったが、やがて唇を開くと、静かに、しかし力づよい語韻でいった。「いや、お心のほどよく分りました。もし長くお見捨てなくば、不肖ながら、犬馬の労をとって、共に微力を国事に尽しましょう」「何かのご縁でしょう。將軍は私にめぐり会うべく諸州をさまよい、私は將軍のお招きを辱のうすべく今日まで田野の廬にかくれて陽の目を待っていたのかも知れません」・・・と。

その11、軍師諸葛孔明：<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/syokatu.pdf>

その12、新野を捨てての亡流

劉備玄德は、遂に、「三顧の礼」を尽くし、諸葛亮を軍師として迎えた。その劉備は劉表から与えられた新野の城を居城としていた。「その11」は、その様子を詳しく述べたもおであったが、この「その12」では、新野の城を居城とする劉備が曹操の大軍に攻められ、新野を捨てて逃げ出さざる得なくなつて、処々方々を亡流する苦勞の時期を描く。諸葛亮を得た劉備がいよいよ諸葛亮の考える天下三分の計に向かうその初期の段階というのは、まさにそのような亡流の時期であったのである。

曹操は、この頃、北方攻略という大事業をなしとげている。すなわち、建安12年（207年）、袁氏に味方する蹋頓ら烏桓族を討ち、20数万人を降伏させ、袁紹の子の袁尚・袁熙を滅ぼしている。幽州を平定し、河北（黄河の北岸地域）を統一して圧倒的な勢力を保持するようになっていたのである。残るは荊州の劉表、江東の孫権、益州の劉璋、漢中の五斗米道、関中の馬騰を筆頭とした群小豪族であったが、当面の討伐目標は寄る辺の無い劉備であったのである。曹操の考えとしては、まず深夜の劉備を討伐して、劉表の荊州を手に入れ、その後に呉を責めることであった。

その呉であるが、呉の発展は、あくまで文化的であり、内容の充実にあつた。何しろ、先主孫策のあとを継いで立つた孫権は、まだ若かつた。曹操より二十八も年下だし、玄德とくらべても、二十二も若い当主である。それと、南方は、天産物や交通にめぐまれているので、自ずと人々と然るべき人材は呉に集まつた。文化、産業、ひいては軍需、政治などの機能が活潑であつた。そういう呉の孫権は、劉表の配下、荊州の江夏（湖北省・武昌）の城にある黄祖を攻めた。父の仇討ちに成功する。「その12」は、その様子も描いているが、何と言っても「その12」の中心は、劉備亡流の様子である。

ただひたすら南下する劉備らは、新野より随う領民を擁した為に進行に遅れが生じてしまう。途上の当陽県長坂に差し掛かつた際、遂に曹操軍に追いつかれ攻撃を受けてしまう。劉備は随つて来た領民、妻子を見捨てて一刻も早く撤退、勢力を整え再起を図ろうとしたが離散する配下將軍は数知れず、側近の糜竺や簡雍らともはぐれてしまつていた。そして、混乱の最中に劉備の妻の糜夫人・甘夫人や劉備嫡子の阿斗（後の劉禪）家臣の糜竺らは魏兵に生け捕られてしまつた。これを重視した劉備の將軍・趙雲は、敵中、単騎で夫人らの救出に引返す。とある民家付近で倒れてた糜夫人を発見する。糜夫人は重傷を負つており、足手まといになるとして趙雲に阿斗を託すと、傍に在つた井戸へと投身自殺を図つたのだつた。趙雲は、阿斗を擁して劉備の元へと無事に帰参するのであるが、その間、目覚ましい諸葛亮の計略と張飛働きがあつた。諸葛亮の計略と張飛の氣迫とを懼れた曹操軍は追走が俚ならず、劉備は亡流を続ける。

玄德主従とその残兵は、初め江陵へさして落ちてきたのであるが、にわかにな道を変更して、沔陽から漢津へ出ようと、夜も昼も逃げつづけるのであつた。



汉津口=漢津口

その12、新野を捨てての亡流：<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/bouryuu.pdf>

その13、孔明が呉に赴く

玄徳の生涯のうちでも、「その12」で述べた亡流は大難中の大難であったといえるであろう。玄徳は、長坂橋附近でもさんざんに痛めつけられ、漢江の渡口まで追いつめられてきた頃は、進退まったくきわまって、「わが運命もこれまで——」と、観念するしかないような状態に陥っていた。ところが、ここに一陣の援軍があらわれた。さきに命をうけて江夏へ行っていた関羽が、劉から一万の兵を借りることに成功して夜を日についで馳けつけ、漢江の近くでようやく玄徳に追いついてきたものであった。この「その13」は、そこから話が始まるが、関羽と再会した劉備は、まもなく長坂橋附近で離れ離れになっていた孔明や江夏城の城主・劉（りゅうぎ）とも再開した。

孔明は、「さし当って、次の策こそ肝腎です。夏口（漢口附近）の地は要害で水利の便もありますから、ひとまず夏口の城にお入りあって、曹操の大軍に対し、堅守して時節を待たれ、また劉君にも江夏の城へお帰りあって、わが君と首尾相助けながら、共に武具兵船の再軍備にお励みあるが万全の計でしょう」と、まず将来の方針を示した。劉は、同意したが、「それよりも、もっと安全なのは、ひとまず玄徳どのを、私の江夏城へおつれして、十分に装備をしてから、夏口へお渡りあつては如何ですか。——いきなり夏口へ入られるよりもそのほうが危険がないと思われませんが」と、自分の考えを述べた。その考えにしたがって劉備や孔明は江夏城に落ち着いたのであった。

その後まもなく、呉の魯肅が劉備に会いに来た。劉表が死去するとすぐに荊州の様子を探りに来ていたのであるが、その途中、当陽の長坂で劉備との対面して孫権の意向を伝え、劉備と同盟を結び曹操と対峙したい事を進言していたのである。呉との同盟は、孔明にとって天下三分の計の実現のために必須条件であるので、孔明は魯肅に連れ立って呉に赴く。

呉では、圧倒的な軍事力を誇る曹操に対して、どう対処するかについて侃々諤々の議論が行われていた。降伏をもういでて呉の安全を図るべきという降伏派とあくまで呉の尊厳ある歴史を守るため戦おうとする主戦派に別れていた。

諸葛亮は、降伏派の張松、虞翻、歩騭、薛綜、陸績、嚴峻、程秉を次々と論破した。そして、張温と駱統がさらに難題を持ちかけようとしたとき黄蓋にさえぎられた。黄蓋は「せっかくの話、我が殿にご言上されよ。」と言って、孫権のもとに案内した。諸葛亮は孫権を「魏は兵が多くても寄せ集めの軍。水上戦ともなれば呉が有利でございましょう。」と説得し開戦を勧めた。孫権はいろいろと悩んだ挙句、遂に、開戦を決意する。

大都督周瑜は、陣鼓のとどろきに迎えられて、やおら駒をおり、中軍幡や司令旗などに囲まれている将台の一段高い所に立って、「令！」と、全軍へ向って伝えた。「――王法に親なし、諸将はただよく職分に尽せ。いま魏の曹操は、朝権を奪って、その罪のはなはだしさ、かの董卓にもこえるものがある。内には、天子を許昌の府に籠め奉り、外には暴兵を派して、わが呉をも侵さんとしておる。この賊を討つは、人臣の務めたり、また正義の擁護である。それ戦いにあたるや、功あるは賞し、罪あるは罰す。正明依怙なく、軍に親疎なし、奮戦ただ呉を負って、魏を破れ。――行軍には、まず韓当、黄蓋を先鋒とし、大小の兵船五百余艘、三江の岸へさして進み陣地を構築せよ。蔣欽、周泰は第二陣につづけ。凌統、潘璋は第三たるべし。第四陣、太史慈、呂蒙、第五陣、陸遜、董襲。――また呂範、朱治の二隊には督軍目付の任を命ず。以上しかと違背あるな」

その13、孔明が呉に赴く：<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/gokoumei.pdf>

その14、赤壁の戦い

呉に赴いた諸葛亮は、降伏派の張松、虞翻、歩騭、薛綜、陸績、嚴峻、程秉を次々と論破した。そして、張温と駱統がさらに難題を持ちかけようとしたとき黄蓋にさえぎられた。黄蓋は「せっかくの話、我が殿にご言上されよ。」と言って、孫権のもとに案内した。諸葛亮は孫権を「魏は兵が多くても寄せ集めの軍。水上戦ともなれば呉が有利でございましょう。」と説得し開戦を勧めた。孫権はいろいろと悩んだ挙句、遂に、開戦を決意する。このようにして、呉と魏との大戦が始まる。それを導いた孔明の説得工作の話が「その13」であった。「その4」は、いよいよ、かの有名な赤壁の戦いである。

孔明の使命はまず成功したといってよい。呉の出師は思いどおり実現された。

周瑜は「孔明もいまわが陣中にあるが、共に曹操を討つには、ぜひ一度、劉予公も加えて、緊密なる大策を議さねばなるまいかと考えておる。」と使者を劉備のもとにやる。劉備はそれに応じて、呉に向かう。劉備は周瑜との会談を終えて、その帰り道、江岸まで急いできたところ、水辺の楊柳の蔭から手をあげて、孔明が突如現われ出でる。相抱いて、互いの無事を歓ぶ。孔明は、その歓びを止めて、「私の身はいま、その象においては、虎口の危うき中にいますが、しかし安きこと泰山の如しです。決してご心配くださいますな。——むしろこの先とも、お大事を期していただきたいのは、わが君の行動です。来る十一月の二十日は、まさしく甲子(きのえね)にあたります。お忘れなく、その日は、ご麾下趙雲に命じて、輕舸を出し、江の南岸にあって、私を待つようにお備えください。いまは帰らずとも、孔明は必ず東南の風の吹き起る日には帰ります」というやいなや、劉備を船へせきたてると、自分も忽然と、呉の陣営のうちに、姿をかくしてしまった。

時、建安十三年十一月。荊州降参の大將を船手の先鋒として、魏の大船団は、三江をさして、徐々南下を開始していた。そして呉の軍船と小競り合いが始まるのである。その間、いろいろな駆け引きや策略が行われるが、それらについてはここでは省略する。本文をじっくり読んでもらいたい。

ある日、呉軍の軍議がひらかれた。呉の諸大将はもちろん、孔明も席に列していた。「江上の大戦となれば、いま貯蔵の矢数ぐらいは、またたく間に費い果たして、不足を来すであろう」との周瑜の言葉を受けて、孔明は、かの有名な100本の矢である。その様子は次のYouTubeをご覧ください。

<https://www.youtube.com/watch?v=A5ko1wpWInE>

この後、これも有名な「孔明・風を祈る」場面となる。

その祭壇を作るため、魯肅、孔明も馬を早めて南屏山にいたり、地形を見さだめて、工事の督励にかかる。士卒五百人は壇を築き、祭官百二十人は古式にのっとして準備をすすめる。東南の方には赤土を盛って方円二十四丈とし、高さ三尺、三重の壇をめぐらし、下の一重には二十八宿の青旗を立て、また二重目には六十四面の黄色の旗に、六十四卦の印を書き、なお三重目には、束髪の冠をいただいて、身に羅衣をまとい、鳳衣博帯、朱履方裙した者を四人立て、左のひとは長い竿に鶏の羽を挟んだのを持って風を招き、右のひとは七星の竿を掲げ、後のふたりは宝剣と香炉とを捧げて立つ。こうした祭壇の下にはまた、旌旗、宝蓋、大戟、長槍、白旄、黄鉞、朱幡などを持った兵士二十四人が、魔を寄せつけじと護衛に立つなど――何にしてもこれは途方もない大形の行事であった。

時、十一月二十日。孔明は前日から齋戒沐浴して身を浄め、身には白の道服を着、素足のまま壇へのぼって、いよいよ三日三夜の祈りにかかるべく立ったのであった。

周瑜の部将の黄蓋は、互いに密集している魏の船団に向けて発進、油をかけ薪を満載した船に火を放ち敵船に接近させた。折からの強風にあおられて曹操の船団は燃え上がり、炎は岸边にある軍営にまで達した。船団は大打撃を受け、おびただしい数の人や馬が焼死したり溺死したりした。曹操は後退し烏林に陣を張った。この時、周瑜らは渡渉し陸上から曹操の陣に追撃をかけ、曹操軍は潰走したのである。

八十余万と称えていた曹操の軍勢は、この一敗戦で、一夜に、三分の一以下になったという。溺死した者、焼け死んだ者、矢にあたって斃れた者、また陸上でも、馬に踏まれ、槍に追われ、何しろ、山をなすばかりな死傷をおいて三江の要塞から潰乱した。曹操は命からがら逃げに逃げたのである。左右の森林から一隊の軍馬が突出して来た。そして前後の道を囲むかと思えるうちに、「常山の子龍趙雲これに待てりっ。曹操っ、待て」という声が聞えたので、曹操は驚きのあまり、危うく馬から転げ落ちそうになった。敗走、また敗

走、ここでも曹操の残軍は、さんざんに痛めつけられ、ただ張遼、徐晃などの善戦によって、彼はからくも、虎口をまぬがれた。そしてあるところでは、張飛が現れ、曹操は、耳をふさぎ、眼をつぶって、数里の間は生ける心地もなくただ逃げ走った。やがてちりぢりに味方の将士も彼のあとを慕って追いついて来たが、どれを見ても、傷を負っていない者はない有様だった。峠を越え、約五、六里ばかり急いで来ると、青龍の偃月刀をひっさげ、駿足赤兎馬に踏みまたがって来る美髯將軍——関羽であった。「最期だっ。もういかん！」一言、絶叫すると、曹操はもう観念してしまったように、茫然戦意も失っていた。——ふと見れば、曹操のうしろには、敗残の姿も傷ましい彼の部下が、みな馬を降り、大地にひざまずき、涙を流して関羽のほうを伏し拝んでいた。「あわれや、主従の情。……どうしてこの者どもを討つに忍びよう」ついに、関羽は情に負けた。無言のまま、駒を取って返し、わざと味方の中へまじって、何か声高に命令していた。曹操は、はっと我にかえって、「さては、この間に逃げよとのことか」と、士卒と共に、あわただしくこの峠から駆け降って行った。

この日、夕暮に至って、また行く手の方に、猛気旺な一軍の来るのとぶつかったが、これは死地を設けていた伏勢ではなく、南郡（湖北省・江陵）の城に留守していた曹一族の曹仁が、迎えに来たものであった。

曹仁は、曹操の無事な姿を見ると、うれし泣きに泣いて、「赤壁の敗戦を聞き、すぐにも駆けつけんかと思いましたが、南郡の城を空けては、後の守りも不安なので、ただご安泰のみを祈っていました」と、曹操が生きて帰ってくれたことだけでも、無上の歓喜として、今はかえって怨むことも知らなかった。曹操もまた、「今度ばかりは、二度とこの世でそちに会うこともないかと思った」と、語りながら、共に南郡の城へ入って、赤壁以来、三日三夜の疲れをいやし、ようやく、生ける身心地をとり戻した。

その14、赤壁の戦い：<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/sekiheki.pdf>

その15、草刈場・荊州

「その14」は、赤壁の戦いの話であったが、「その15」は、劉備がどのように荊州を手に入れるかという話と、漢中と蜀の状況に関する話である。

曹仁、曹純、曹洪の魏の軍がその居城・南郡城を出て周瑜の軍と激しい戦いをしているその間に、趙子龍の率いる劉備軍が南郡城を占領してしまう。孔明は、趙子龍が南郡の城を取るや否や、すぐ曹仁の兵符（印章）を持たせて人を荊州に派し、（南郡あやうし、すぐ救え）と云い送った。荊州城の守将は、兵符を信じて、すぐ救援に駆け出した。荊州の城の留守を測っていた孔明は、すぐ張飛を向けてそこを占領する。同時にまた、同様な手段で、襄陽へも人をやった。（われ今あやうし。呉の兵を外より破れ）と、いう檄である。襄陽を守っていた夏侯惇も、曹仁の兵符を見ては、疑っているいとまもなく、直ちに城を出で、荊州へ走った。かねて孔明の命をうけていた関羽は、すぐ後を乗っ取ってしまう。かくて南郡、襄陽、荊州の三城は、血もみずに、孔明の一握に帰ってしまったものである。

荊州、襄陽、南郡三カ所の城を一挙に収めて、一躍、持たぬ国から持てる国へと、劉備はその面目を一新した。

零陵の太守劉度も劉備軍は難なく降伏せしめ、玄德、孔明は轡をならべて、零陵へ入城する。前の太守劉度は、そのまま郡守としてここに置き、子の延は劉備軍に加える。

そしてさらに、桂陽（湖南省・郴県）へ進んだ。桂陽の太守・趙範も趙子龍へ、降参を申し入れる。その後日談として、趙範の兄嫁である美女の縁談話があり、劉備も仲人を勝手であるが、趙子龍は断る。趙子龍曰く。「私も美人は嫌いではありません。けれど、趙範の兄とは、遠い以前、故郷で一面識があるものです。今、それがしがその人の妻をもって妻としたら、世の人に唾（つば）されましょう。また、その婦人がふたたび嫁ぐときは、その婦人は貞節の美德を失います。」と。玄德も孔明も、黙然とふかくうなずいたまま、後は多くもいわなかった。趙子龍こそ真に典型的な武人であると、後には人にも語ったことであったが、その時はわざと一片の恩賞をもって賞したに止まった。

また、武陵の太守金旋も、張飛に攻められ、城門をひらき、張飛を迎え入れて、元来、玄德を景慕していた由を訴えた。玄德は鞏志を武陵の太守に任ずる。

太守韓玄の治める長沙も、関羽の働きによって陥落する。そして劉備は良将・黄忠と魏延を獲るのである。

ほどなく玄德は、荊州へ引揚げた。中漢九郡のうち、すでに四郡は彼の手に収められた。ここに玄德の地盤はまだ狭小ながら初めて一礎石を据えたものといっている。

周瑜は孫権の妹・妙齡の呉妹君と劉備との縁談を進める。いずれ挙式の前後に、機を計って、劉備を刺し殺してしまおうとするつもりでもない策略である。しかし、劉備は、孔明の意見も聞いた上で、承諾して呉に向かう。

呂範は、媒人役として、当然、玄德の客館へ、その日の迎えに出向いた。玄德は、細やかな鎧の上に、錦の袍を着、馬も鞍も華やかに飾って、甘露寺へおもむいた。趙雲は、五百の兵をつれて、それに随行した。甘露寺では、一山の僧衆が数十人の大将と迎えに立ち、呉侯孫権をはじめ、母公、喬国老など、本堂から方丈に満ち満ちて待ちうけていた。玄德の態度は実に堂々としていた。温和にして諂わず、威にして猛からず、儀表俗を出て、清風の流るるごとく、甘露寺の方丈へ通った。「さすがは」と、一見して、呉侯孫権も、畏敬の念を、禁じ得なかった。争えないものは、人間と人間との接触による相互の感情である。ひと目見て、孫権以上、彼に傾倒したのは母公であった。

相思相愛の二人・呉妹君と劉備は呉で新婚生活を楽しむが、孫権は二人がそのまま呉に残ることを望んで楼宮を造築する。楼宮の結構は言語に絶し、園には花木を植え、池畔には宴遊船をつなぎ、廊廂には数百の玻璃燈をかけつらね、朱欄には金銀をちりばめ、歩廊はことごとく大理石や孔雀石をもって張ってあった。しかし、荊州が風雲急を告げてきたので、劉備は荊州に帰ることとなる。それに対し、孫権は劉備を荊州に返してはならないと心に決め、いろいろと対策を講じる。呉妹君と劉備の二人は、苦勞しながらも呉を脱出する。怒った孫権は、返してなならじと追っ手を差し向ける。その時の劉備にしたがう呉妹君の気持ちと働きは、「その15、草刈場荊州」の一つのハイライトである。

荊州に無事帰り着いた劉備は、再び曹操の荊州攻略に立ち向かう。そのさなか、劉備は統（ほうとう）と出会い、配下に向かい入れる。統は、字が士元、襄陽名士のひとりで、孔明がまだ襄陽郊外の隆中に居住していた頃から、はやくも知識人たちの間には、統ハ、鳳凰ノ雛。孔明ハ、臥セル龍ニ似ル。――と、その将来を囁目されていたのだった。

結局、統は、副軍師中郎将に任ぜられ、総軍の司令を兼ね、最高参謀府にあって、軍師孔明の片腕にもなるべき重職につく。劉備は、「鳳凰ノ雛。孔明ハ、臥セル龍ニ似ル」と称された偉大なる二人の人物を得たことになる。これで劉備は蜀を手に入れる万全の準備ができたことになる。

その頃、馬騰の一族・馬超が西涼州（甘肅省・陝西奥地一帯）にいて、曹操と争っていた。馬超、韓遂の大軍が長安全城を占領してしまったため、長安全城の城主・鍾は、長安全城を逃げ出し、次の潼関に拠って、許都へ向って悲鳴をあげた。曹操は、ただちに三軍団を編成し、馬超討伐に向かう。曹操の本軍と夏侯淵の軍と曹仁の軍、魏の総力を挙げての対応である。結局、馬超は、追い詰められ追い詰められ、また、取って返しては敵に当り、踏み止まっては追手と戦ったが、果ては、わずか三十騎に討ちへらされ、夜も寝ず、昼も喰わず、ひたすら西涼へさして逃げ落ちた。

ところで、その頃の漢中（陝西省・漢中）の状況であるが、漢中の住民のあいだを、一種の道教が風靡していた。五斗米教である。中央に遠い巴蜀の地である。令を以て禁止することも、兵を向けて一掃することもできない。そこで教主張魯に対しては、卑屈な懐柔策を取ってきた。彼に鎮南中郎将という官職を与え、漢寧の太守に封じて、そのかわりに、「年々の貢ぎを怠るなかれ」と誓わせて来たのである。その張魯は、勢力拡大のため、入蜀の準備を進めていた。

巴蜀。すなわち四川省。四川省の盆地は、米、麦、桐油、木材などの天産豊かであり、気候温暖、人種は漢代初期からすでに多くの漢民族が入って、いわゆる巴蜀文化の殷賑を招来していた。その都府、中心地は、成都である。北方、陝西省へ出るには有名な劍閣の嶮路を越えねばならず、南は巴山山脈にさえぎられ、関中に出る四道、巴蜀へ通ずる三道も嶮峻巍峨たる谷あいには、橋梁をかけ葛の岩根を攀じ、わずかに人馬の通れる程度なので、世にこれを、「蜀の栈道」と呼ばれている。蜀の劉璋は漢の魯恭王が後胤といわれ、父劉焉が封を継いでいたが、その家門と国の無事に馴れて、いわゆる遊惰脆弱な暗君だった。漢中の張魯が攻め込んでくるのではないかと戦々競々としていたのである。蜀の諸大將も、みな怯えた。評議の席で張松が、曹操に助力をしてもらおうとする案を献策した。その献策にしたがい、劉璋は、金珠錦繡の贈物を、白馬七頭に積んで、張松に託した。もちろん曹操への礼物である。千山万峽、嶮岨を越えて、使者の張松は都へ向った。張松は曹操と会見できたが、どうもウマが合わないのか、張松の説得がまずかったのか、曹操はなかなかいい返事をしない。

その15、草刈場・荊州：<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/kusakariba.pdf>

その16、劉備の入蜀

「その15」は、劉備がどのように荊州を手に入れるかという話と、漢中と蜀の状況に関する話であったが、「その16」は、いよいよ劉備が入蜀し、蜀を手に入れる話である。

覇者は己れを凌ぐ者を忌む。張松の眼つきも態度も、曹操は初めから虫が好かない。しかも、彼の誇る、虎衛軍五万の教練を陪観するに、いかにも冷笑している風がある。当然、曹操は赫怒した。張松はたちまち大勢の兵に囲まれて遮二無二、練兵場の外に引きずり出された。そして鉄拳を浴び、足蹴をうけ、半死半生にされて突き出された。

張松はすぐに本国へ帰ろうと思った。しかし、彼は途中から道をかえて、荊州のほうへ急いでいたのだった。かくて彼は、期せずして趙雲子龍、関羽、劉備の歓待を受け、蜀を托するには劉備こそふさわしいとひそかに思い、帰り際に「西蜀四十一州図」一巻を献上する。そして自分の親友二人（法正と孟達）のなを告げて蜀に帰る。蜀に帰ると直ちに主君劉璋に頼るべきは曹操ではなく劉備こそふさわしいと説得する。

その後しばらくして、劉璋の使者・法正がやってきて劉備の入蜀をお願いする。劉備は公明と相談、さまざまな情勢分析の上、入蜀を決断する。荊州には、孔明が残ることになった。その配備は。襄陽の堺に関羽。江陵城に趙雲子龍。江辺四郡には張飛。といったように、名だたる者を要所要所にすえ、孔明がその中央荊州に留守し、四境鉄壁の固めかたであった。

劉璋と玄德との対面の日は来た。両者の会見は、和気藹々たるものであった。「世は遷り変るとも、おたがい宗族の血はこうして世に存し、また巡り会って、今日をよろこぶことができる。力を協せて、ふたたび漢朝の栄えを見ることに兄弟ひとつになろうではありませんか」情を叙べるに玄德は涙し、劉璋も力を得て、彼の手を押し戴き、「これで蜀も外から侵される心配はない」と、かぎりなく歓

んだ。歓宴歓語、数刻に移って、玄徳はあっさり帰った。彼のつれて来た五万の軍勢は、城外の江江畔（ふこうこうはん）においてあるからである。

その後、劉璋の求めに応じて、葭萌関（かぼうかん）において漢中の張魯軍と対峙することとなる。葭萌関は四川と陝西（せんせい）の境にある難攻不落がある。張魯軍はそこに立てこもっている。両軍は悪戦苦闘のままがいに譲らず、はや幾月かを過していた。

そんな折、曹軍が南下してきたので、呉の孫権から荊州へ救いを求めてきた。やむなく劉備は、劉璋に対し、兵と糧食を借り求めた。しかし、劉璋は、戦線には用いられないような老朽の兵ばかり四千人と穀物一万石、それに廢物にひとしい武具馬具などを車輛に積んで、使者と共に、玄徳へ送りどけた。玄徳はその冷淡に怒った。

葭萌関を退いた玄徳は、ひとまず涪水関（ふすいかん）の城下に総軍をまとめ、涪水関を占領する策を練った。そして劉備は、策を講じて涪水関をとる。劉備は、その涪水関を拠点として、成都周辺の要害を次々と手中に納めていった。そんな折、呉の孫権の使者が漢中に来る。張魯はたちまち力を得、かねての野望を達せんと、漢中軍をもって葭萌関へ攻めかかる。

そんなこともあって、劉備は苦境に陥るが、そんな折、孔明は、荊州の守りを関羽と関平に任せ、張飛や趙雲の率いる劉備軍を伴って、劉備のもとにやってくる。

その頃、忽然と、蒙古高原にあらわれて、胡夷の猛兵をしたがえ、隴西（甘肅省）の州郡をたちまち伐り奪って、日に日に旗を増している一軍があった。建安十八年の秋八月である。この蒙古軍の大將は、さきに曹操に破られて、どこへか落ちて行った馬騰の子馬超だった。征くところ草を薙ぐように、敵を風靡し、この軍団は、強大になった。これを曹操は見逃すわけではない。夏侯淵、姜叙、楊阜の軍が攻めてきたのである。さすがに魏軍は強力。馬超は乱軍のなかをよく戦いつつ、一族の馬岱、徳などと共に、城外遠く、何処ともなく逃げ落ちて行った。

馬超とその部下、馬岱、徳などの六、七騎は、流れ流れて漢中にたどりつき、この国の五斗米教の宗門大將軍張魯のところへ、身をよせた。そして、葭萌関に向かう。葭萌関へ新たにかかって来た敵は馬超という西涼第一の豪雄である。これに対して張飛が立ち向かう。なんども戦うが二人の勝負は容易につかない。このままでは二人のどちらかが死ぬ。劉備はそうさせてはならないと考えた。そのとき孔明は、すでにいろいろと手を打っていたらしく、馬超を味方に引き入れることに努力する。結果、遂に、馬超は劉備の配下となる。

馬超は、玄德に向って、「ご奉公の手始めに、私と、私の従弟の馬岱と、ふたりして成都におもむき、劉璋に会って、張魯の野心を語り、また漢中の内情を告げ、劉皇叔の兵と戦うことの愚かなることをよく説いてみたら——と思いますか」と、進言した。そして、その結果、遂に、劉璋は、城を出て劉備に降参の意を表した。玄德はみずから迎え立ち、劉璋の手をとって云った。「私交としては、人情にうごかされるが、時の勢いと、公なる立場から、きのうまで、成都を攻め、今日、あなたの降を容れることとなった。かならず個人同志の情誼と、公人的な大義とを混同して、この玄德を恨みたもうな」玄德の眼には、熱い涙すらみえたので、劉璋は、むしろ降伏の時を遅くしたことを、自身の罪と思ったほどであった。そして、劉璋は蜀を去って、荊州の南郡に移り、まったくその地位と所をかえて余生する身となった。

この後、劉備が漢中を手に入れ、漢中王となるまでにはいろいろな劇的な場面があるのだが、それについては本文を読んでもらいたい。ここでは省略する。

その16、劉備の入蜀：<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/nyuusyoku.pdf>

